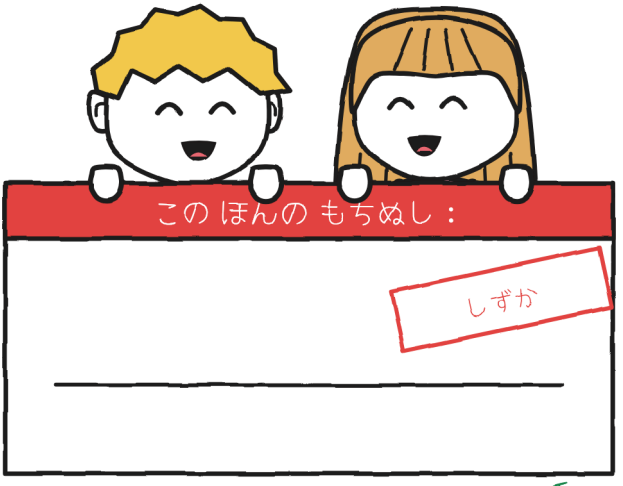


しずか。あけるまでは。 —J.

見つけたら返してね。サプライズなしで、持ち主に。

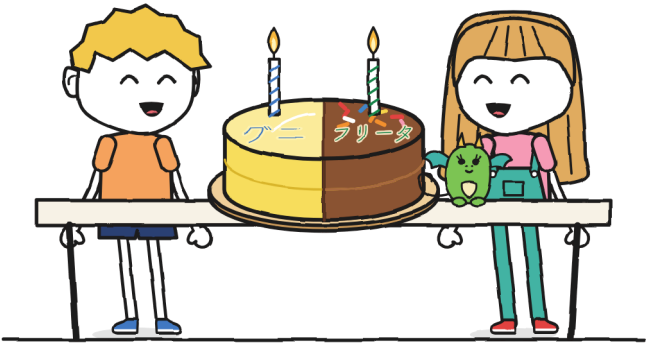
おはなしの なかだけ

このはんこは、おはなしの なかだけで おきる ことの しるし：ほんとうの ドラゴンは いないし、にもつは とんで もどって こない。ほんとうの パーティーは、さいごの ページを 見てね。 —J.

ありえない はいたつ・5

ふたりで ひとつの ケーキ

LinguAula



(グニの ノート)

サイズ **XL**・イラスト小説・13**+**

ありえない はいたつ・5
ふたりで ひとつの ケーキ

シリーズの5さつめ。これまでの本は「このにもつはかみつく」「かみなりまえにあけるな」「へんそう、おねがいします」「ここじゃダメ、パンくず！」。

文と絵：LinguAula

日本語版：LinguAula

サイズ XL・イラスト小説・13+

初版：2026

© 2026 LinguAula · info@linguaula.com

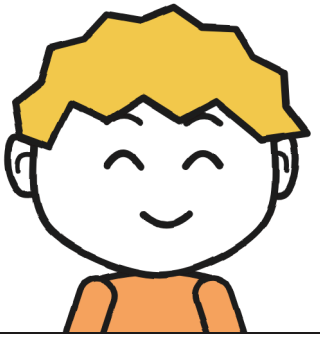
自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

フォント：Zen Maru Gothic、Yomogi、Zen Kurenaido、Andika、Patrick Hand、Caveat、Courier Prime（SIL OFLライセンス）。

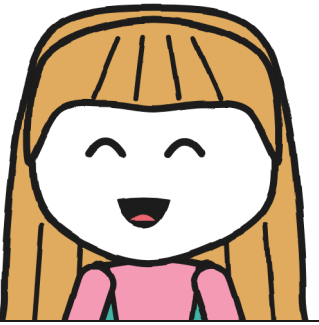
linguaula.comでしょうごとにれんしゅう

この本を書いているあいだに、けがをしたケーキは一つもない。二つに切られたのはあるけれど。 —J.

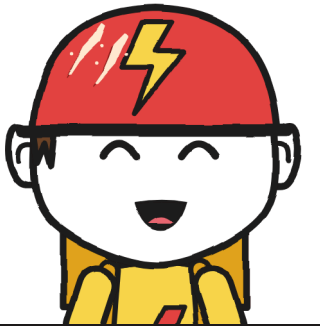
だれが だれ？



グニ。どようびの はいたつやさん。この ノートは グニの。しずかな ごごが すき。



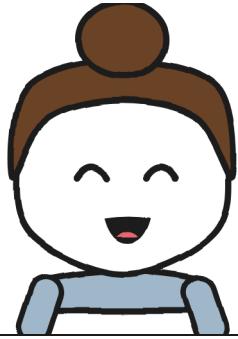
フリータ。みどりで かいて、「J.」と サインする。おんがくの ある パーティーが すき。サプライズも。



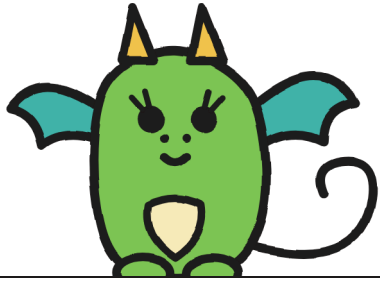
トニョ。イナズマびんの はいたつやさん。じっぷんで とどかなければ タダ。はこばないのは、ずる。



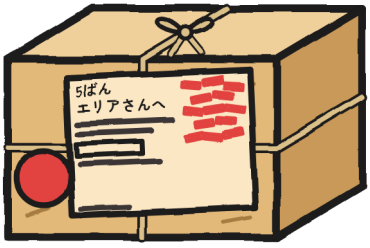
マラさん。「ありえない はいたつ」の てんしゅ。まじょの ぼうしを かぶっている。いうよりずっと おおくを しっている。



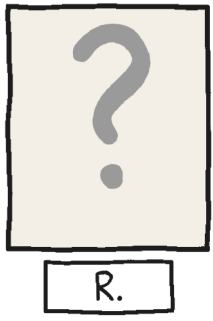
エリアさん。まちの パンやさん。オーブンが ひとつ、てが ふたつ。



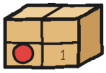
パンくず。ドラゴンの こ。ベラさんと くらして いる。ろうそくが すき。すきすぎる。



5ばんの にもつ。そとから みると、ほかと おなじ。ラベルには「はいる ところで くみたてる」と ある。



R.は、だれにも とどけられない にもつを おくるひと。その なまえを だれも いわない。



第 1 章

ふたつの しょうたいじょう

ノート4は、スニーカーが一つ、ねむっているところで終わった。ノートの終わりかたとして、これ以上のものは思いつかない。ノート5はピンク色だ。ケーキのアイシングみたいな、いちごのピンク。すみには、店のはんこがおしてある。マラさんは土曜日の朝、何も言わずにカウンターにこれを置くと、インクのびんをならべはじめた。そんなに気をつけてならべる必要はないのに。あれが、マラさんの「見ないふり」だ。

最初のページに書く言葉を、ぼくは一週間ずっと試していた。ノート2には「公式」、ノート3には「ひみつ」、ノート4には「決定版」と書いた。どうやら、ぼくは鍵のかかった言葉がすきらしい。でも今回は、さがさなくてよかった。何日も前から、自分でも気づかないままほしがっていたものが、ひとりでに出てくるみたいに、言葉は向こうからやってきた。

いちばん上に「グニのはいたつノート5」と書いた。ノートには、そう書くものだ。その下に、けずったばかりのえんぴつで、ゆっくりと、たった一つの言葉を書いた：

しずか。

びっくりマークはつけない。しずかな「！」なんて、矛盾（むじゅん）している。ぼくは矛盾（むじゅん）には気をつけることにしている。

フリータはカウンターのむこう側で、ラジオを聞いているオウムみたいに首をかしげて、のぞきこんでいた。ノートを見せてとは言わなかった。見せてもらう必要がないのだ。フリータは、さかさまに読むのも、ふつうに読むのと同じくらい速い。しかも、ずっとずうずうしく。

「しずか」とフリータは言った。ぼくにではなく、その言葉に。

もう書きにくくなったみどりのペンを出して、指一本でノートを引きよせると、その下に書いた：

「しずか」と書くのは、これから何が待っているか知らない人だよ。 —J.

三回読んで、まちがっているところをさがした。見つからなかった。それなのに、心配になったのは思ったよりずっと少なかった。

ほかのノートを読んでいない人のために書いておく。店の名前は「ありえない はいたつ」。店主はマラさん。魔女で、むらさき色の帽子をかぶっていて、はんこをおすと、火を消したろうそくのにおいがする火花が飛ぶ。左の棚には、「もどってきた荷物」をしまっている。だれにもとどけられなかった荷物で、送り主はぜんぶR.だ。受けとった人が消えないインクでラベルにサインしないと、夜明けに、荷物は飛んで棚にもどってしまう。はじめは二十こあった。フリータとぼくは、これまでに四つをとどけた：ドラゴンのたまご、足の生えたたね、ベル、それに「とうちゃく」ひとそろい。かべには、みどりの字で、のこり16と書いてある。

きのう、金曜日の十六日は、ぼくのたんじょう日だった。家でお母さんとお祝いした：レモンのパウンドケーキに、カップが二つ。だれも歌わなかった。かんぺきだった。

歌わなかったのには、わけがある。うちでは、うっかり忘れたのではなくて、約束なのだ。お母さんは前の晩、パンを切る包丁を手に、きいてきた：「歌う？ 歌わない？」。ぼくは、

歌わない、と答えた。お母さんは、サインでもするみたいにうなずいて、ちゃんと守ってくれた。ケーキは同じ大きさの四つに切った：二つは今日の分、二つはあとの分。そして長いあいだ、聞こえたのは、スプーンがカップにあたる音と、冷蔵庫の音と、ずっと遠くを走るバスの音だけだった。あの午後でいちばんよかったのは、バスの音が聞こえたことだ。

フリータのプレゼントのことは、あとで話す。ちゃんと場所をあげないといけないから。

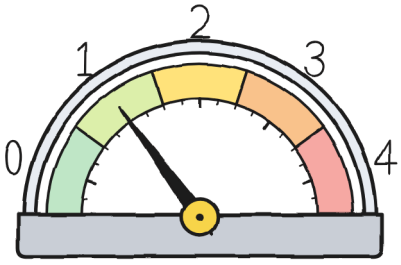
誕生日をきちんと記録するために、その夜、ぼくは装置を一つ発明した。ぼくの発明としては四つ目で、ふるえメーター、赤メーター、ここメーターの次になる。時計みたいな針のついた文字盤に、目もりが五つ。0はしーん。1はスプーン。2はおしゃべり。3はうた。4はトランペット。名前は「さわぎメーター」、「パーティーの さわぎは どのくらい」。針を1に合わせて、その下に小さなカップをかいた。ぼくのカップだ。

フリータはことわりもなくページをめくって、文字盤を見て、カップを見て、もう書きにくいペンで書いた：

メーターが1の誕生日は、誕生日じゃない。おやつよ。 —J.

さわぎメーター

パーティーの さわぎは どのくらい



0・しーん　1・スプーン　2・おしゃべり　3・うた　4・トランペット！

ぼくの たんじょうび（きのう）

フリータはペンのふたをして、カウンターにひじをつくと、まるで今日の予定を読み上げるみたいに言った。

「二十一日の水曜日（すいようび）は、わたしの誕生日（たんじょうび）。それに、いっしょに祝うって約束（やくそく）したでしょ」

「二十一日のあとで」とぼくは言った。

「二十四日（よっか）の土曜日。五時に」

「五時に」

ふたりともメモした。ぼくは、ピンクのノートにえんぴつで。フリータは、みどりのペンで小さな手帳に。それを、まるで試験の答えみたいに、腕ぜんたいでかくした。ぼくはひじでかくした。奥では、マラさんが書類にはんこをおして、火を消したろうそくのにおいの火花が飛んだ。ふたりとも顔を上げなかった。火花はにおうのに。カウンターの両はしに、横むきで、半分背中を向けて、ふたりの人間が同じ日づけを、それぞれ自分のものみたいに書いていた。

それ以上は、どちらも何も言わなかった。今思うと、変だと思う。約束したばかりの二人が、書いたものをかくすなんて。そのときは、ひじをいつもの場所に置いたほうがよく書けるんだ、と思っていた。

ぼくは、どんなパーティーになるか、もう知っていた。フリータも知っていた。

ぼくが知っていたのは、こうだ。

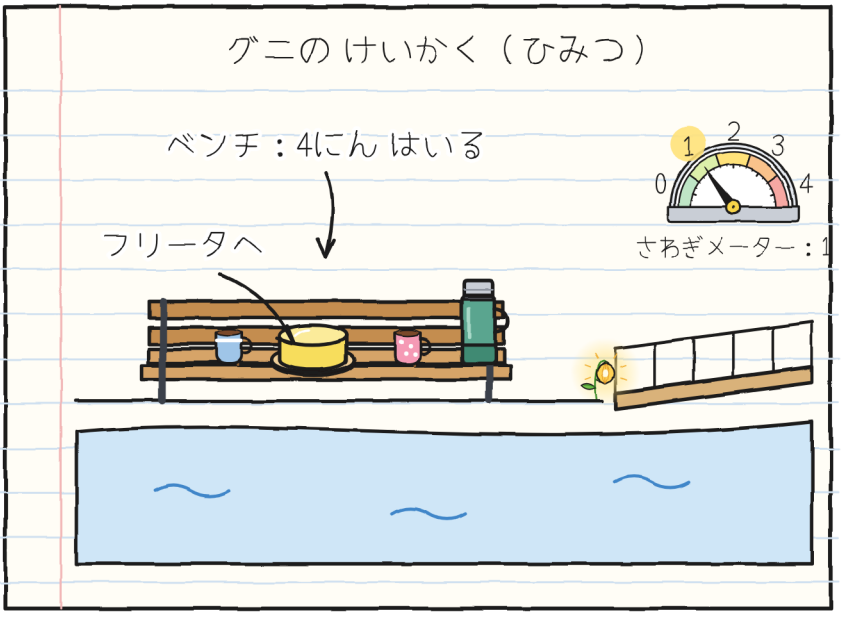
フリータには、しずかな午後が必要だ。いつも走って、時間をはかって、質問ばかりしていて、やっと止まったと思っても、足だけは、まだどこかへ行こうとしているのがわかる。板の橋のベンチで、運河のそばで、音をたてずに、水筒と小さな

ケーキで、おやつをする。きっといい。あのベンチは知っている。ベンチのはしには、ゆるんだ板があって、先のほうにすわるとゆらゆらする。町で、お店が一つも見えないのは、あのベンチだけだ。何も起こってほしくないとき、ぼくはあそこへ行く。

サプライズにするつもりだった。フリータは何も準備しなくていい。来るだけ。いちばんいい贈りものに思えた：めんどうをかけない贈りもの。

聞いてみることもできた。カウンターのそばに立って、えんぴつを宙にうかせたまま、考えた：「フリータ、急がない午後はどう？」。でも、質問には答えがあって、その答えは「いや」かもしれない。地図は返事をしない。紙の上でじっとして、待っている。ぼくがかくものは、たいていそれがいちばん得意だ。

その日の朝のうちに、次のページにかいた：ベンチ、板の橋のたもとの小さな街灯、ケーキ、カップが二つ、水筒。お店へ来る途中で、ベンチの大きさをはかっておいた。四人すわれる。いちばん上には「グニの けいかく（ひみつ）」と書いた。だれのひみつか、まちがえようがないように。



フリータの計画のことは、次の金曜日（きんようび）まで知らなかった。このあとのページは、ぼくが書いたのではない。あとから、フリータがぼくのノートに書いたものだ。ぼくのページのすぐとなりに、フリータが置いたとおりにしてある。そこにあるのが、あたりまえだと思うから。

わたしが知っていたのはこう。グニには、本人が気づいていなくても、音楽（おんがく）つきの本当のパーティーが必要。聞いたら「いらない」って言うはず。だから聞かない。 —J.



ガーランドは、フリータが一枚(いちまい)ずつかいた。ぼくの知らなかった気の長さで。

お昼に、トニョが配達からもどってきた。自転車を入口に立てかけて、ヘルメットをかぶったまま入ってくると、自分の箱にすわった。「とりあえず」のすわりかただ。ぼくは朝(あさ)から、青いふうとうを四つ持っていた。えんぴつで、いちばんていねいな字で書いたものだ。ふちを持って、よごさないようにして。

フリータは奥で、セロハンテープの入った引き出しをかきまわしていた。あと十秒しかない、と見積もった。

「これ」と、四つのふうとうをわたした。「一つはトニョの。あとは、マラさんとベラさんとフローラさんの。フリータへのサプライズなんだ。言わないで」

「サプライズなら、ひみつにしとくぜ」とトニョは言った。

「受けとった」と言うときの声だった。ふうとうは、見もしないでリュックに入れた。ぼくは思った：よかった、配達するものを読まない配達員で。

そのあと起きたことは、金曜日にトニョが、時間つきで話してくれた。イナズマ便では、時間は話の半分だから。ぼくはもうお昼を食べに行っていた。フリータが、ゴムでまとめた緑のふうとうの束を持って、トニョの箱に近づいた。九つあった。トニョは二回数えた。

「一つはトニョの。あとは、マラさんと、ベラさんと、フローラさんと、エリアさんと、アントニオさんと、ゾエと、ブルーノと、くつ屋さんの。グニへのサプライズなの。言わないでね」

「サプライズなら、ひみつにしとくぜ」

同じ言葉、同じ顔。これが、配達員とうそつきのちがいなのかもしれない：配達員は、だれが聞くかで、中身を変えない。ただし今回は、自分の二通、青いのと緑のを、つづけて開けた。伝票をたしかめるときみたいに。どちらも同じことが書いてあった：土曜日・二十四日（よっか）・五時。時間のあとには場所が書いてあって、そこは、それぞれちがうことが書いてあった。

トニョは、形容詞（けいようし）なしで話してくれた。それが、あいつなりのやさしさだ。



午後、ぼくはエリアさんのパン屋へ、ケーキをたのみに行った。皮のあたたかいにおいと、名前のわからないあまいにおいがした。入ると、入口のベルがまだゆれているうちに、奥（おく）で台所（だいどころ）のドアがしまる音がした：こしでおしたような、鈍（にぶ）い音。みどりのオーバーオールのはしっこが見えた気がした。

ほかのオーバーオールだろうと思った。みどりのオーバーオールは、いくらでもある。実用的な色だ。

わたしのオーバーオールだった。エリアさんが台所（だいどころ）から外へ連れ出してくれた。 —J.

「小さなレモンのケーキをお願いします」とエリアさんに言った。「上には何ものせないで。二十四日の土曜日、五時、板の橋のベンチに。フリータへのサプライズです」

この言葉を言うのは、一日で二回目だった。もう、かけ声みたいに聞こえた。

エリアさんは、まるい字でそれを紙に書いて、注文用のコルクボードに、画びょうでとめた。そこには、もう一枚、紙がうら返しになってはってあった。

「二十四日の土曜日、五時？ その時間は、もうほかのケーキがあるの。ほかの場所で」

「だれのですか？」

「ひみつ。あなたのと同じ」

ぼくはつま先立ちになった。見てはいけないものを見たいとき、いつもそうする。一度も役に立ったことはない。ほかの人のだろう、と思った。十月は、お誕生日の人が多い。小さな声で、ひびきをたしかめるように、そう思ってみた。わるくない：ひと月は三十一日あって、町は大きい。

「あなたのひみつは守るわ」とエリアさんはエプロンで手をふきながら言った。「もう一つのも、そっちのひみつを。でも、オーブンは一つで、手は二つ。土曜日の五時、二つの手は、一つの場所にしか行けないの」

「じゃあ、もう一つのケーキは？」

「それは、注文した人たちが決めること。わたしはケーキをつくるだけ。パーティーは、つくらない」

メモした：「エリアさん：オーブン1、手2、場所1」。数字は、ちゃんとわかった。「注文した人たち」という言いかたは、ぼくの町に行かないバスみたいに、見送った。

わたしは次の日に言われた。わたしも、「人たち」の意味はわからなかった。 —J.



お店にもどると、トニョがリュックの中身をカウンターにあけ、ふうとうを色ごとにそろえていた。これから配るものを、ていねいにそろえるときのやりかたで。みどりはこっち、青はあっち。それからもう一度数えた。もう一度、さらにもう一度。

「グニ、パーティーのこと、フリータと話した？」

「ううん。サプライズだから」

「そうか」とトニョは言った。「イナズマ便では、あて先が二つある荷物は店を出ないんだ」

「あて先が二つって？」

「それは言えない。たのまれたんだ」

イナズマ便には、何にでもルールがある。トニョがそれを言うたびに、ぼくは、初めて聞くものでも、そうなんだと思う。今回もそうだった。意味がわからないまま、計画のページのすみに書いた。どこにも入らないものが入る場所だ。

トニョは、色のちがうふうとうを一通ずつ、リュックのポケットにしまった。

「この二つは、おれの。あとは月曜に」とトニョは言った。

そのとき、マラさんが、台がなくてもどの棚にもとどくくらい威張っているマラさんが、今回は青いスツールにのって、いちばん上の棚から、両手で箱を一つおろした。5番の箱だ：棚のほかの箱と同じで、大きくも小さくもない。中で、木のものが何かミシッと鳴った。棚には、いつもの大きさの四角いあと

が残って、四つのすきまに加わった。かべのはり紙は、「のこり16」のままだった。

「エリアさんは五時に来るわ」とマラさんは言った。「やっとね」

二つのふうとうが一つのポケットに。どちらも、相手(あいて)のことを知らない。ふうとうのことよ。 —J.

ひとつの おはなし、六つの サイズ

この本には六つのサイズがある。3さいから16さいまでで、ことばは20いじょう。XXS、XS、S、M、Lは同じ絵で、物語を一ページずつ語り、サイズが上がるごとに、細かいところまで話すようになる。XLは小説だ。同じ物語に、グニが心の中で考えても口には出さないことのための場所がある。

CEFRのレベルは目安です。XXS：pre-A1・XS：A1・S：A2・M：B1・L：B2・XL：B2–C1。

それぞれ自分のサイズで。ケーキは同じ。 —J.

おうちの ひとと せんせいへ

linguaula.comでしょうごとにれんしゅう（Lサイズの練習問題つき）